

氏名	久米依子
学位の種類	博士（文学）
学位記の番号	乙第61号
学位授与年月日	2014（平成26）年3月6日
学位授与の条件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	「少女小説」の生成——ジェンダー・ポリティクスの世紀
論文審査委員	主査 倉田 宏子（日本文学専攻 教授） 副査 山口 俊雄（日本文学専攻 教授） 副査 三神 和子（英文学専攻 教授） 副査 村井 早苗（史学専攻 教授） 副査 佐藤 宗子（千葉大学教育学部 教授）

## 論文の内容の要旨

1. 本論文は、日本近代の少女小説に関して、その発生から展開、現状に至るまでの百年以上に渡る経緯を、小説の背後にある社会・文化・教育・メディア状況を踏まえながら追跡し、このジャンルが日本近代のいかなるジェンダー・ポリティクスの中で成立し、読者にどのようなメッセージを発してきたかを考察した論考である。

日本の少女文化や、少女小説を部分的に論じた論文は既にあるが、少女小説の百年の系統を辿った論文はこれまでに無いと考え、新たな資料の提示と分析を試みた。

2. まず論文の「はじめに」と「序章 少女の世界——二十世紀「少女小説」の行方」では、論文内容全体を総括し、論の方向性を概説した。特に、本論文はあくまで「少女小説」というジャンルと表象された少女像を考察するものであり、現実の少女たちを指定するものではないと述べた。なぜなら、実態とジャンルや表象を混同すると、「少女」という記号化された存在に、均一な感性や嗜好があると見なされて、少女の差異化・下層化をはかるジェンダーの抑圧を強化しかねないからである。本論文はむしろ、「少女小説」の変遷を追究することで、ジェンダーのシステム自体やメディアを介してのその浸透を考察することを目標としている。

3. 「第1部 〈少女〉の成立／「少女小説」の誕生」では、近代日本の「少女小説」発生以前のメディア状況から、発生期までの状況と社会的背景を追った。

まず「第1章 無垢な「天使」の物語——西欧近代の少女たち」で、西欧近代の少女が登場する著名な物語の形式を概観した。そして、女性作家の書く「家庭小説」の中の少女像は、良き妻・母となるためのジェンダー規範に即した成長を遂げるが、『不思議の国のアリス』など男性作家の手になる物語では少女に非日常的夢が託されることがあるとし、規範と幻想が語られる振幅が〈少女の世界〉の特徴であり魅力でもあると述べた。

「第2章 メディアにおける〈少女〉の成立—雑誌「少年園」をめぐって」では、少女

がまだ女子と呼ばれていた明治 20 年代(1890 年頃)の、メディアの中の女子の扱い方を、年少者向け雑誌の嚆矢とされる「少年園」(1888～1895)の記事・言説から検討した。結果として、従来言われるように「少年園」が女子を排除していたわけではなく、男子中学生と同じく中等教育を受ける存在として高等女学校生や進学を目指す女子への配慮があったことを検証した。しかし日清戦争期が近づくと儒教的秩序・倫理観の揺り戻しがあり、現実の女子教育が逼迫したのと同様に、「少年園」でも忠君愛国をテーマにする記事が増え、女子向けの記事は減少し、さらに旧時代の「女徳」が教示される。明治 20 年代末には開明的教育状況は変容し、男子／女子の差異が強化される時代が訪れた状況を確認した。

「第 3 章「少年世界」における若松賤子の創作——少女小説の開始」からは、「少年園」に代わって人気雑誌となった、1895(明治 28)年創刊の「少年世界」(博文館)を取り上げた。同誌は創刊年に「少女」という欄を設け、女子読者を積極的に獲得しようとする。それ以後、年少者全体を指す言葉であった「少年」から、「少女」の分離が明示される。「少女」欄の開設は「少女」という存在を浮上させるとともに、少年から少女を分け隔て、囲い込むことでもあった。その「少女」欄の内容を考えるにあたりこの章では、初期「少女」欄の重要な執筆者であり、「少女小説」の原型となる作品を書いた若松賤子に注目し、作家活動全般をふりかえりながら、作品の特性を分析した。そして、早くから西欧的教養を身に付け、当時としては突出した女性知識人であった賤子が、「少女」欄では日本的な良妻賢母規範を教訓する物語を発表したこと、しかしその物語には、規範を語りつつ少女に夢を与えるという、二重化された表現が見られると読み解いた。

「第 4 章「少女小説」の成立——差異と規範の言説装置」では、若松賤子急逝(1896 年)後の明治 30 年代(1900 年頃)の「少年世界」の誌面を追跡した。「少女」欄終了(1897 年)後も「少年世界」は少女向けの物語を掲載し続け、1897(明治 30)年には初めて「少女小説」という名称も使う。しかしそれらは、親に無断で外出すると恐ろしい事件が起きたり、不遇な運命に陥った少女が自身の力では決して幸福になれないなど、〈家の娘〉として規範に従うよう、少女に教え諭す物語群だった。同誌の少年向けの物語では、異世界に冒険に出かけたり、華々しく出世するなど、所与の境遇を超える青少年の話が掲載されたが、少女には自力で運命を切り開くような成功譚は与えられなかった。こうして「少女小説」は、男性中心の明治社会の動向に沿い、少年／少女が決して乗り越えられない差異であること、少女だけに課せられる厳しい規範があることを繰り返し示す役割を担った。なお「少年世界」における「差異」を論じた成田龍一の「『少年世界』と読書する少年たち」(1994 年、「思想」という論文があるが、そこでは国民国家形成期の共同体内部の差異として、「父の職業」や「学業の優劣」と同様に「男子/女子」の差異が並べられている。しかしその捉え方では、「少年世界」の男性読者共同体が、内部の異質な他者である「少女」を否定的媒介項として一体化をはかった問題が見過ごされ、解消不能で非対称なジェンダーの差異が隠蔽されてしまう危険性があると批判した。

その後「少年世界」の少女小説は、ほとんど掲載されない時期をいったん迎えるが、高等女学校令(明治 32 年、1899 年)によって女学生が飛躍的に増えた明治 30 年代半ばになると、行動的な良妻賢母の物語が載るようになる。しかしその傾向が定まる前に、少女雑誌が生まれ、少女小説の掲載の場はそちらへ移行する。第 2 部からはその少女雑誌の動向を取り上げる。

その前に「第5章 芥川龍之介「雛」の少女——所有・父権・伝統」では、大正期の芥川龍之介の小説「雛」(1923年)の中で、明治期の少女がどのように描かれているかを考察した。「雛」は成人向けの一般文学だが、〈文学〉の側から少女の主体化をはばむ物語が語られた例として取り上げた。少女時代に雛人形を売られてしまった老女の一人称回想形式の小説であり、語りの階層化や登場人物像、伝統文化の扱いなどによって、回想主体であるはずの少女は後景に退き、「父」の像や〈作者〉の意見の方が強調される構造になっている。近代の著名な男性作家の小説でも、少女表象が家父長制下の従順な娘として表現されたという事態を確認した。

4. 「第2部 少女セクシュアリティの表象／「少女小説」の展開」は、明治末期に創刊された少女雑誌が、大正・昭和期に至るまでにどのような少女小説を掲載し、モードの変容を経て、ジャンルを代表する作家と作品を生み出したり、時代の変化に応じていったかなどの軌跡を追った。

「第6章 構成される少女Ⅰ—少女雑誌の創刊と少女セクシュアリティの発見」は、最初の少女雑誌「少女界」には、立身出世するなど行動的な少女の話も載ったが、「少女界」は長続きせず、むしろ「少年世界」の教訓性を引き継いで創刊された、妹分的な「少女世界」(明治39年、1906年創刊)に人気が集まったこと、そこに高等女学校の教育理念〈良妻賢母教育〉の反映があると考察した。しかし日露戦争後の好況期に至ると、少女雑誌は少女の美的価値を称揚するようになり、教訓一辺倒ではなく、少女のセクシュアリティが少女小説で描かれる時代が到来することを検証した。

続く「第7章 構成される少女Ⅱ—少女小説ジャンルの形成と友愛物語」では、第6章で見た動向の中から、少女の清純な官能美を愛でる男性のまなざしを取り入れた、少女友愛小説が生れた経緯を見た。この友愛小説は決して規範逸脱的な物語ではなく、異性愛のレッスンとなるファンタジーであり、ジェンダー制度と家父長制を補強する物語だと指摘した。そしてこの物語の型をふまえ、ジャンルを代表する作家・作品と見なされる、吉屋信子『花物語』が1916(大正5)年に登場し、美的な少女セクシュアリティを味わえる作として男性読者にも秘かに受け入れられ、ジャンルの認知が進んだ様相を追跡した。

「第8章 馴致されるセクシュアリティ—モダニズム期前後の少女雑誌」では、友愛小説発生以後の少女雑誌の誌面を追い、友愛小説のブームが去ると、良妻賢母的規範が再び強化された点を検証した。しかし1920年代にはモダニズムの風潮がセクシュアルな図版や物語によって少女雑誌にも及び、さらに1930年代に至ると、そのセクシュアリティは少女雑誌に相応しい、逸脱しない表現として収束する。時代の流行を取り入れつつも周到に閉じて行く少女文化の特性を論じた。

「第9章 昭和期の少女像の展開」では、男性作家による成人向けの一般文学で、少女が男性を肯定し精神的に支えたり、自己実現(主体化)できない少女の語りが提示されるようになり、けなげでかわいそうな少女の表象が好まれた状況を概括した。女性作家については尾崎翠を取り上げ、尾崎が成人向け文学の中でモダンな恋愛物語を試みるいっぽう、少女小説ジャンルで鋭く繊細な感覚的世界を描き出し、それがジェンダー制度や家父長制から逃れた〈少女の世界〉の表現となっているのではないかと考察した。

「第10章 セクシズムの中の吉屋信子」は、少女小説の代表作家となった吉屋信子の、

成人向け大衆小説も含めた作家活動を、先鋭的セクシュアリティや二重化される表現の問題として論じた。吉屋の少女友愛小説『花物語』は、制度を脅かさないファンタジックで華麗な物語として多くの少女読者に受け入れられ、また少し年齢の高い読者向けの小説では、女性同士の恋愛が、「本道」ではない「第二恋愛道」として提示された。同性愛を小説中で扱いながら、異性愛体制を強化するような言説が繰り返されたのである。しかしその形式によって規範をかいくぐり、家父長制度下の社会でも作品群が出版できたと判断した。さらに大衆小説の分野で吉屋の小説は、異性愛や家族の再生を語る制度補完的な物語の装いの底部に、女性間の同性愛的絆を潜め、あるいは小説中に女性の不満や憤懣の言葉を書き込んで、男性中心社会への批判を発信した。このような二重化された表現を吉屋テクストの戦略として読み解いた。

「第 11 章 「少女小説」から従軍記へ——総力戦下の吉屋信子の報告文」は、第 10 章で見た吉屋の二重化された表現が、戦時体制に協力する作家の言説として機能してしまった面を考察した。女性大衆作家の第一人者となった吉屋は、人気作家ゆえに、出版社や新聞社に後押しされて従軍女性作家として戦地に赴き、報告文を発表する。戦争協力的で愛国的な言説となったその報告文中の、日本の民間人が虐殺された現場での感想や、中国人女性への想い・呼びかけには、吉屋なりの戦争への抵抗的姿勢が見えなくもない。とはいえ少女小説以来の、含みの多い二重化された表現様式を取りつつ、戦地報告文が抱えるコロニアルな抑圧に加担してしまったと指摘した。

5. 「第 3 部 少女文化の変容／水脈としての「少女小説」」では、昭和戦前期から戦後、そして現代にいたる文化状況の中で、「少女小説」がジャンルの内容や名称を変化させた点や、少女小説から派生し発展した「少女マンガ」の表現の特性、さらに現代の少女像の問題としての「ライトノベル」が描く少年少女の関係などを取り上げた。

「第 12 章 昭和戦前期から戦後へ——少女文化の変容」では、昭和戦前期の「少女小説」に、自立の夢を持つ少女が登場したり、少年小説的な冒険や敵討ち物語のモードが取り入れられるなどの題材の広がりがあり、抒情的で感傷的なジャンルという括りに収まらなくなった点を確認した。さらに戦後になると、家父長制の解体と男女平等の社会が到来し、異性愛の恋愛を描くことが可能となったため、一部に過激な表現も含みながら少女小説がジュニア小説へと変容していく。その後、少女マンガの影響を受けて新たな生氣を得た少女小説が再生され、人気を博したことを確認した。

「第 13 章 少女小説から少女マンガへ——ジャンルを超える表現」は、少女小説から多大な影響を受けて成立した戦後の少女マンガが、表現様式を洗練させ、〈文学性〉を帯びたジャンルとして、他文化にも影響を与えるまでに成長した経緯を概括した。

「第 14 章 ライトノベルとジェンダー——少年少女の出会いとその陥穽」は、まず、21 世紀に入って「ライトノベル」というジャンル名がついた少年向けの物語群が、急速に売り上げを伸ばし、少女小説もその中に含まれて考えられつつある現状を述べた。そしてライトノベルの少女像が、旧来の理想化された少女よりも元気で活発な像に描かれるが、結局は相変わらず少年の優位性を保証する表象として使われていることを問題視した。

「第 15 章 戦う〈少女〉の任務と少女コミュニティー」では、第 14 章の検討から発展させて、現代日本のサブカルチャーで好まれる「戦闘美少女」や女装少年の問題を考察し

た。ハリウッド映画でも近年は、戦う女性像が増加したが、そのほとんどが大人の女性であるのに対し、現代日本のライトノベル、アニメ、マンガで戦うのは少女である。そこに、巨大搭乗型ロボットが好まれるのと同様に、少年の能力拡張と自己承認の夢が託されていると論じた。また同じくサブカルチャーで好まれるようになった女装少年や少女コミュニティ志向は、かつての少女小説の友愛物語のパターンをふまえ、少女セクシュアリティを手軽に味わえるツールとして活用されているとした。少女小説の伝統はこのように意外な文化へと継承されるが、それはやはり百年続くジェンダー・ポリティクス(差異の政治性)のもたらす表象であり、少女像が利用され消費される傾向を、今後も注意深く見守る必要があるのではないかと締めくくった。

6. 以上、明治から平成に至る少女向けの物語と少女表象の変容を、メディア・社会状況との関係から追ひ、ジェンダーの問題を考察した。原稿枚数は600枚。

## 論文審査結果の要旨

### 審査の概要

本論文は、研究対象としてこれまで未開拓であった「少女小説」に関する初の通史的研究である。

日本近代の「少女小説」に関して、発生から展開、現代に至るまでの百年以上にわたる系譜を、小説の背後にある社会・文化・教育・メディア状況を踏まえながら追跡し、このジャンルが日本近代のいかなるジェンダー・ポリティクスの中で成立し、読者にどのようなメッセージを発してきたかを、図版などを効果的に挿入しながら究明したものである。

本論文の構成は、以下の通りである。

はじめに

序章 少女の世界——二十世紀「少女小説」の行方

- 1 〈少女〉という境界
- 2 「少女小説」の誕生と展開

第1部 〈少女〉の成立／「少女小説」の誕生

第1章 無垢な「天使」の物語——西欧近代の少女たち

第2章 メディアにおける〈少女〉の成立——雑誌「少年園」をめぐる

- 1 少年雑誌と少女読者
- 2 「少年園」の基本姿勢
- 3 女子読者と誌面
- 4 女子に関する論説
- 5 「女子之忠」の規定
- 6 少年との分離

第3章 「少年世界」における若松賤子の創作——少女小説の開始

- 1 「少年世界」の「少女」欄の開設
- 2 「少年世界」以前の若松賤子の活動——「幼子」の称揚
- 3 少女に語る物語—婦徳と裁縫
- 4 少女の位相と物語の方法
- 5 〈教訓〉から逃れる表現

第4章 「少女小説」の成立——差異と規範の言説装置

- 1 「家の娘」の位置
- 2 閉ざされる少女小説
- 3 「われわれ」のなかの少女
- 4 良妻賢母の新たな任務

第5章 芥川龍之介「雛」の少女——所有・父権・伝統

- 1 「雛」の語りと物語内容
- 2 家父長制のなかの「雛」
- 3 「雛」の文化と家の繁栄
- 4 父権と伝統——後景化される少女

第2部 少女セクシュアリティの表象／「少女小説」の展開

第6章 構成される少女Ⅰ——少女雑誌の創刊と少女セクシュアリティの発見

- 1 少女雑誌の冒険
- 2 家父長制下の家庭悲劇と女性の分断
- 3 〈愛される〉少女の時代

第7章 構成される少女Ⅱ——少女小説ジャンルの形成と友愛物語

- 1 少女友愛小説の発生
- 2 強制的異性愛制度の補強とジャンルの成立

第8章 馴致されるセクシュアリティ——モダニズム期前後の少女雑誌

- 1 「文学者」を出さない「幸福」
- 2 モダニズムの刺激
- 3 一九三〇年代の少女雑誌とセクシュアリティ
- 4 「寵児」の行方

第9章 昭和期の少女像の展開

- 1 男性作家の〈少女幻想〉——救いとはかなさ
- 2 〈少女幻想〉から逃れること——尾崎翠の可能性

第10章 セクシズムのなかの吉屋信子

- 1 下位項目の作家として
- 2 少女小説というモード
- 3 「第二恋愛」としてのレズビアン・セクシュアリティ
- 4 〈家族の神話〉と女性同士の絆

第11章 少女小説から従軍記へ——総力戦下の吉屋信子の報告文

- 1 総力戦と少国民少女
- 2 少女小説の戦略

	3	総力戦と女性従軍作家の登場
	4	「女性幼児虐殺」の現場
	5	仮構される連帯
	6	「共存共栄」の不可能性
	7	林芙美子と非戦闘員
第3部		少女文化の変容／水脈としての「少女小説」
第12章		昭和戦前期から戦後へ——少女文化の変容
	1	長編少女小説と行動する少女——エンターテインメントの時代に
	2	男女共学時代の変容——ジュニア小説から少女小説の再生まで
第13章		少女小説から少女マンガへ——ジャンルを超える表現
	1	少女文化からの発展
	2	少女マンガの〈文学〉性
	3	少女マンガからの越境
第14章		ライトノベルとジェンダー——少年少女の出会いとその陥穽
	1	ライトノベルという名称
	2	ジェンダーと性別化されたレーベル
	3	少年と少女の役割
	4	ジェンダーを考えるために ——『キノの旅』『制覇するフィロソフィア』の試み
第15章		闘う〈少女〉の任務と少女コミュニティー
	1	闘う少女の国
	2	欲望のための表象
	3	回避と依存
	4	女装少年と少女コミュニティーの問題
		初出一覧
		おわりに
		索引

続いて、各部各章の概要を述べたい。

「はじめに」と「序章 少女の世界——二十世紀「少女小説」の行方」では、論文全体を概説し、本論は大衆的児童文化という括りでまとめられてきた百年余の「少女小説」の役割を問い直すものであり、その際問題とする〈少女〉は、実態としての少女ではなく、あくまでも「表象」であり〈記号〉としての〈少女〉であると述べている。本論の目的は、近代日本が〈少女〉カテゴリーをどのようなものとして構築し、それをなぜ維持しようとしてきたかを、ジェンダー・ポリティクスとの関係性から明らかにし、「少女小説」は読者に楽しみを与えながら、規範を教示し浸透させる装置でもあったことの検証をめざすと述べている。

「第1部 〈少女〉の成立／「少女小説」の誕生」は、近代日本の「少女小説」発生以前のメディア状況から、発生期までの状況と社会的背景を追っている。

「第1章 無垢な「天使」の物語——西欧近代の少女たち」では、西欧近代の少女の物語には教訓性と非日常的夢想の二面性がみられ、後者は幻想に委ねて日常から解放されたという男性側の願望の投影であり、規範と幻想が語られる振幅が〈少女の世界〉の特徴であり魅力でもあると述べている。しかし、「文化の伝承も、つまり文化の典型も、男性の手に握られている」というジェンダーが絡んでいることを見逃してはならないと指摘している。

「第2章 メディアにおける〈少女〉の成立——雑誌「少年園」をめぐる」では、少年雑誌の嚆矢「少年園」（明治21年～同28年）を取り上げ、同誌は当初少なくとも女子の学問を奨励したが、教育勅語発令（明治23）と日清戦争によって〈少女〉を〈少年〉から分化させたとし、〈少女〉像という制度を成立させていく過程を追っている。

「第3章 「少年世界」における若松賤子の創作——少女小説の開始」では、男女学生の分化の始まりを明治20年代後半から30年代に見て、その先導となったのが「少年世界」（明治28年創刊）の「少女」欄開始（明治28年9月）であったと指摘している。これは高等女学校令に先んじて〈少女〉に対する時代の意識を形にしたものであるが、その存在を〈少年〉とは異なるものとして囲い込むものでもあり、同時に少女雑誌が多数創刊される端緒ともなった。「少女小説」の原型となる若松賤子の作品「着物の生る木」（明治28・9）、「おもいで」（明治29・1、2）には、日清戦争期の保守的な時代風潮の圧力のなかで婦徳と裁縫という良妻賢母規範を教導する一方、教訓をかいくぐって非日常世界が美しく語られている点に〈少女文学〉の先駆的なファンタジー性をみている。

「第4章 「少女小説」の成立——差異と規範の言語装置」では、若松賤子急逝後の明治30年代の「少年世界」の誌面を検証している。「少女」欄終了後も、最初の少女小説と位置づけられる田中夕風「水の行方」（明治30・1、2）をはじめ少女向けの物語を掲載し続けるが、それらは〈家の娘〉として規範に従って生きるよう、〈あるべき少女像〉を教え諭す物語群であった。「少女小説」は、少年／少女が決して乗り越えられない差異であること、少女だけに課せられる厳しい規範があることを示す役割を担い、このような暗くやりきれない少女小説群は読者の支持を得られなくなり、ほとんど掲載されなくなる。「少年世界」に少女向けの読み物が再び掲載されるのは、明治36年の第9巻からで、高等女学校令（明治32）公布以降の女子教育全体の活性化に対する出版メディア側の反応の一つとして捉えることができる。行動する良妻賢母の物語が歓迎される時代を迎えるが、この傾向が定まる前に少女雑誌が生まれ、「少女小説」掲載の場はそちらへと移行すると指摘している。

「第5章 芥川龍之介「雛」の少女—所有・父権・伝統」では、疎外される〈少女の物語〉の顕著な例として芥川の「雛」（大正12）を取り上げ、作中で明治期の少女がどのように描かれているのかを分析している。

「第2部 少女セクシュアリティの表象／「少女小説」の展開」は、少女雑誌を舞台に「少女小説」が発展期を迎える明治30年代後半から大正・昭和戦前期にかけての動向を追いつつ、「少女小説」がジャンルとして認められてゆく経緯と、少女雑誌の傾向の変遷を追っている。

「第6章 構成される少女1 — 少女雑誌の創刊と少女セクシュアリティの発見」では、



金港堂刊行の「少女界」（明治35年創刊）は、学問によって出世した女性の物語と前近代の孝女烈婦像を併存させるが、大正初期には市場から撤退し、博文館刊行の「少女世界」（明治39年創刊）は少女冒険小説を出す、やがて〈愛される〉少女像にシフトし、少女セクシュアリティの発見が、新しい少女規範となってゆくことを指摘。いわゆる〈少女文化〉は、決して乗り越えることのできない性的〈差異〉を強制すると同時に、解放区でもあるという二重性のなかで花開くことを検証している。

「第7章 構成される少女Ⅱ — 少女小説ジャンルの形成と友愛物語」では、強固な異性愛排除の規範が少女同士の友愛物語を生み出した経緯を検証している。最も早い友愛小説は、沼田笠峰「心の姉」（明治42・1）で、時代の規範に反するものではなく、むしろ強制異性愛制度の補完として働いたと指摘。このジャンルを代表する作家・作品が吉屋信子『花物語』（大正5〜）で、美的な少女セクシュアリティを味わえる物語として男性読者にも秘かに受け入れられ、ジャンルの認知が進んだことを検証した。

「第8章 馴致されるセクシュアリティ — モダニズム期前後の少女小説」では、友愛小説発生以後の「少女小説」の動向から友愛ブームが去る屈折した様相を検証。明治末期から大正初期までは大人びた女性画が多かったが、大正期後半には低年齢の少女をイメージした図版が増える一方、読者間の直接文通を逸脱行為と見做すようになり、雑誌に対する学校や家庭からの懸念が高まり、少女文化は再び「良妻賢母」の規範のなかに読者を囲い込むことになる。しかし、1920年代にはモダニズムの風潮がセクシュアルな図版や物語によって少女雑誌にも及び、さらに1930年代に至ると、その傾向は少女雑誌にふさわしく逸脱しない表現として収束する。このように少女雑誌は、創刊から第二次世界大戦期まで、常に少女への規範を守旧的に堅持しようとする姿勢を維持したと論じている。

「第9章 昭和期の少女像の展開」では、少女に救いとはかなさを求める男性作家の〈少女幻想〉を、川端康成『浅草紅団』（昭和4〜5）、『禽獣』（昭和8）、『乙女の港』（昭和12〜13）や、太宰治「富嶽百景」（昭和14）、「女生徒」（昭和14）、「千代女」（昭和16）から検証。他方、尾崎翠の「少女小説」には、教訓性もカップルへの希求も希薄であり、家父長制下の「家の娘」の生き方を教導するというジャンルの役割を超え、現世の論理から逸脱する領域にまで感性を解放する志向をみせたと指摘している。

「第10章 セクシズムのなかの吉屋信子」では、大衆小説家として名をなしながら、文学的に軽視される少女向け物語の執筆も続け、「少女小説」がジャンルとして定着・成長することに貢献した吉屋の三系統の同性愛表現を分析し、体制補完的なテキストに秘められた戦略を指摘している。まず、『花物語』に代表される少女友愛物語は、同性愛を扱いながら異性愛制度を脅かさないファンタスティックで華麗な物語として受け入れられた。女性同士の恋愛を「本道」ではない「第二恋愛道」として提示した『屋根裏の二処女』（大正9）、「或る愚かしき者の話」（大正14）、『返らぬ日』（大正15・4〜10）は、結果として異性愛体制を補完する周縁性の物語として機能した側面がある。しかし、強制的異性愛体制と家父長制に忠実にみえる大衆小説の分野では、異性愛や家族の再生を物語る体制補完的な物語の装いの底に、女性同士の同性愛的絆を潜め、男性中心社会への批判を発信していることを解説している。

「第11章 少女小説から従軍記へ — 総力戦下の吉屋信子の報告文」では、吉屋は「少女小説」や大衆的家庭小説において、体制補完的な物語内容に男性中心社会への抵抗を内

包させて人気作家になったが、女性も子供も動員される総力戦期に、体制側を利する方向に使われてしまったことを検証した。女性大衆作家の第一人者となった吉屋は、従軍作家として戦地へ赴き、敵方の女性に戦争の惨禍を訴え、女性同士の協力によって国境を越えた平和をもたらそうと主張する報告文を書くが、結果として状況追隨的に機能してしまったことは否めず、作家が戦地へいくことの危険性、あるいは「二重構造」を強いられる時代のなかで語ることのきわどさを指摘している。

「第3部 少女文化の変容／水脈としての「少女小説」」は、昭和戦前期から戦後へ、さらには現代に至る文化状況の中で、「少女小説」がジャンルの内容や名称を変化させた点、「少女小説」から派生し発展した少女マンガの表現の特性や、ライトノベルが描く現代の少女像の問題点などを取り上げ分析している。

「第12章 昭和戦前期から戦後へ——少女文化の変容」では、昭和戦前期から戦後までの「少女小説」の流れを概観している。大正期末から昭和戦前期には、時代少女小説やユーモラスでコミカルな「少女小説」も増えてゆき、表現領域がある程度拡がり、戦後の単行本の「少女小説」に繋がる物語のバリエーションが生まれたとする。戦後は、家父長制の解体と男女平等の社会が到来し、異性愛を少女のあるべき目標とする「少女小説」の誕生に、新たな装いをとった良妻賢母主義の提示を読み取っている。やがて性愛表現を含む「少女小説」はジュニア小説へと変容し、その後、少女マンガの影響を受けた新たな「少女小説」が氷室冴子や新井素子ら若い書き手によって再生され、人気を博したことを確認している。

「第13章 少女小説から少女マンガへ——ジャンルを超える表現」では、「少女小説」から多大な影響を受けて成立した戦後の少女マンガは、表現様式を洗練させ、文学性を帯びたジャンルとして成長する。以後「少女小説」と少女マンガは影響を与えあいながら、其々のジャンルの多様性を深め、他文化にも影響を与えるまでに発展する経緯を明らかにしている。

「第14章 ライトノベルとジェンダー——少年少女の出会いとその陥穽」では、21世紀に入って活況を呈す少年向けの物語群であるライトノベルの状況と、「少女小説」と少女キャラクターとの関係について考察している。ライトノベルには、「性別隔離文化」の伝統を継承する面と、部分的に「性別隔離」性から踏み出す面の双方がみられるが、総体的にはジェンダー秩序を再生産する役割を果たしつつあることを検証している。

「第15章 闘う〈少女〉の任務と少女コミュニティー」では、ライトノベルをはじめアニメ、マンガなどの昨今の日本のサブカルチャーには闘う少女像が頻出し、女装少年＝「男の娘」も人気が高まりつつあるが、こうした21世紀の〈少女幻想〉とも呼べる一連の表象を分析している。1980年前後から世界的に闘う女性の表象が溢れるようになるが、日本の闘うヒロインはなぜ〈少女〉でなくてはいけないのか等を検討し、戦闘美少女から女装の「男の娘」、そして少女コミュニティー志向までの一連の〈少女〉の表象とその物語は、百年以上続くジェンダー・ポリティクスによって生み出されているといえると結論づけている。

## 審査結果

本論は、「少女小説」というジャンルの成立と展開、その末裔としてのジュニア小説、少女マンガ、ライトノベルまでを視野に収めた通史的研究として初めての優れた達成である。

近代の良妻賢母規範の補強・再生産という大枠の中で成立発展したジャンルながら、そこからの逸脱の側面が見られること、その際、主に吉屋信子に関して言及されていたように、意味の「二重性」（ダブルメッセージ）が作動していたという指摘は大変興味深い。

周知のように少女論としては従来、本田和子論が権威ある高名な論として位置づけられてきた。『少女浮遊』（青土社、1986年）等に代表される本田論は、〈少女〉を、子供とも大人の女性とも異なる浮遊する越境的存在として位置づけたが、本論は、「少女小説」にみる百年余の〈少女〉は常にジェンダー・ポリテイクスに絡めとられた存在であったことを緻密に検証しており、本田論との本質的差異を示している。この点は本論の真髓であり、本田の少女論を大きく塗り替えたと評価できる。また、随所で本田論に訂正を迫っている点も注目される。「少年園」の捉え方、男女分化の始まりの時期、「少女文化」の始まりの時期、若松賤子の翻訳作品への評価等に関して異論を唱えている点も重要である。

主に雑誌というメディアを通じて成立・展開していったこのジャンルにおける、作者・雑誌・読者（層）との関係を丁寧に追っている。とりわけ〈少女〉像を発信した雑誌の特質についての言及が綿密であり、雑誌の歴史的跡づけの役割も果たしており、高く評価できる。

全体の中で中心にあるのは、やはり吉屋信子に対する論考であろう。児童文学と近代文学の双方を研究の基盤とする著者であるからこそ、「少女小説」の枠を超えた論の展開を、もう一度枠の中に意味づけ返すことができたと考えられる。とくに、従来の「感傷的」等の否定的評価、それに対する本田和子の新たな評価等を乗り越えるかたちで、吉屋の屈折した表現を丁寧に読み解き、新鮮かつ独創的な意味をこの分野の研究にもたらしたといえる。

ただし、次のような指摘がなされた。

そもそも「少女小説」を受容できる階層とはどのような階層だったのか、少女の階層差についても言及がほしかった。

第1部・第2部では、主としてそれぞれの時期における主要な雑誌・作家等に注目しながら構成されている。網羅的ではないにしても、時代の主流を掬い得ている感があり、説得力がある。それに対し第3部は、駆け足での概括、一定の時期の一部のジャンルに目を向けた論であり、第1部・第2部をある程度補完しつつ現在の時点を明らかにする役割は果たしているが、前2部との落差を感じるころはある。例えば、荻原規子や上橋菜穂子の作品なども、ライトノベルに目を向けるよりは、まず検討されてしかるべきかもしれない。

1990年代以降の児童文学・児童文化関連のフェミニズム・ジェンダー研究の流れについて

ての言及がほとんどないことが残念である。とくに、横川寿美子が『初潮という切札』（JICC出版局、1991年）で切り拓いた研究的な意義には、触れてほしかったと思う。

外国文学の日本への導入プロセスがもう少し詳しく説明されるとよかった。例えば、外

国文学のフランシス・ホジソン・バーネットたちが、どのような社会的背景のもとで人気を博していたか、それを若松賤子がどのように解釈したか等に言及すると、日本において理想の〈少女〉像がどのように作られていったかが一層解りやすくなったのではないだろうか。また、その後の日本における翻訳の少女小説の流れにも、目を向けてみてほしかった。とくに第二次大戦後は、従来の日本の「少女小説」に対する批判の中で、英米を中心にした多くの「少女小説」翻訳叢書が刊行されており、それらが実際に多くの少女読者を獲得していた。

「少女小説」全体の俯瞰も可能であれば示してほしかった。明治期であれば巖谷小波、昭和前期であれば講談社系の男性作家などの作品との関係性である。

以上のように、意見や問題点、要望なども出されたが、本論は、明治から今日までの百年余にわたる〈少女〉表象の変容をジェンダー・ポリティクスとの関係性において分析し、その全容解明を試みた初の優れた論であると全審査員が一致して評価した。欧米の家庭小説などとは一線を画す近代日本の「少女小説」の独自性・特性を、日本の近代化および文化表象のあり方の特異性の中から闡明し、周縁化されてきた「少女小説」の領域解明にも資するものであることは疑いえない。少女論の進展にも大きく寄与したことはいうまでもないだろう。

なお、本論は、同書名で2013年6月12日に青弓社から刊行されており、第37回日本児童文学学会特別賞を受賞したことを付言しておきたい。

以上の審査結果を総合的に判断し、本審査委員会は、本論文が博士論文としての水準に達していると評価し、博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論を得たことをご報告する。

上記の判定結果に相違ありません。

2014年3月3日